

続かなさを課題にもつ子どもたちのもう1つの選択

— 地方のフリースクールの実践を通して —

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
野中 浩一

本論文は、不登校など様々な理由によって学校を継続する難しさをもった学生を受け入れている、ある1つのフリースクールの実践についてのものである。こうした学生たちの継続の困難について、社会環境の要因として捉える社会モデルや、個人的な問題として捉える医学モデルに当てはめて限局することなく、「続かなさ」の現象として捉えている。著者は、これらの学生の学校生活における「続かなさ」—それは不登校・ひきこもり・社会集団への不適應といったものごとの続かなさに加え、その背景にある人と人との関係性の続かなさも表す—の傾向に変化をもたらすことに貢献しており、このフリースクールで提供される環境や条件、または続かなさに変化をもたらすオルタナティブ性に焦点を当てている。

論文中では、フリースクールにおける日々の活動や学校生活に焦点を当て、学生、スタッフ、経営・運営者の3つの視点を用いて、生徒やスタッフの動的な関係性を捉えたエピソードとして対話と相互作用を描き出した。

これらエピソード分析においては、生徒およびスタッフの相互関係の下で作用している以下の要素を示している。それは、時間のゆとり、1人1人に関わる個別性、同じ空間で同じ時を過ごす家族性、様々な活動（学校行事等）の関与における自己選択性、および安心と信頼の形成である。これらの要素は、フリースクールの現場において率直で開かれた会話と笑いをもたらしている。このような環境のもとで、スタッフおよび経営・運営者は、生徒の人生の一時期に伴走し、対話による相互変容を目指し、生徒自らの意思決定を支持する姿勢を通底させている。本研究では、生徒およびスタッフの相互関係の下で作用している以上の要素が、生徒たちの生活の中でこれまで続けてきた「続かなさ」に変化をもたらすことに重要な働きをしていることを見出した。